

第22回小野十三郎賞受賞者インタビュー

受賞者・今野和代
聞き手・中塚鞠子

中塚 この度は小野賞受賞、おめでとうございます。

今野 ありがとうございます。

中塚 三冊目の詩集になりますね。今度のはタイトルも内容もすごく迫力があって、出た時から評判でした。私、第一詩集の『パセリ市場』結構好きだったんですけど。

今野 タイトルは最初これではなかったんですけど。

中塚 今野さんとは長い付き合いなので、呼び慣れているので今ちゃんのほうが実感出ますね。いいですか。どこで出会ったのでした？最初は。

今野 一番最初は、えーと。

中塚 なしくずしの仲間みたいな。

今野 そうです。昔から知ってるような感じ。名前からまず最初聞いてたから。

中塚 そう。私もだいたい前から知ってたんですけど。

今野 そうですよ。

詩を書きだしたきっかけ

中塚 実際に詩を書き出したのは、倉橋健一さんに出会ってからと受賞の言葉にありますけど。

今野 そうですね。ただ、子供の時、小学校の五年、六年の受け持ちの先生が日共の党员的の若い、美人の先生で、その影響があります。小学校三年生くらいからその先生の存在は知っていて。その先生のクラスだけいつも放課後みんなでわつと歌を歌って全然授業の感じが違って、すごく気になつて。沖田妙子先生っていうんだけど。

中塚 名前まで覚えてるんだ。

今野 だって今も付き合いあるから。小学校三年生くらいになつたら子供ってだんだん賢くなつて、周りの、他所のクラスのこととか気がつきはじめじゃないですか。それで、あの先生のクラスいいなと思つて。

今野の三年の時の担任の先生も梶先生つて変わった先生だった。今考えたら戦争を体験した先生だと思ふんだけど、学校の庭のところ畑を作つたりとかして。今野は絵描くの好きやったんですけど。絵の展示つて、普通学校の先生つてこうやって一枚べらつと絵を貼つたりするでしょ。とこ

ろがその先生は描いた絵を半分切つて貼つたりする。今考えたら問題になるかもしれないけど。

中塚 結構いい先生に会つたんですね。その頃に感性が伸びたというのがあるかも。

今野 どうか。

中塚 そんな先生なかなかない。

今野 でも一番は、小さい時に兄とか、入れ墨をしておつちゃんとかに可愛がられて。小さい時から人懐っこい子で、赤ちゃんの時から人様に大事にしたらう子やつたらしい。

中塚 お兄さんがほんとにいたのね。

今野 兄は三つ上なんですけど。ちょうど全共闘世代になると思ふんだけど。兄は小さい時からすごくやんちゃで、三輪車に乗つてどんどん勝手に一人でどこか行つたりとか。そんなことをする子だった。

中塚 詩を書きだしたのは？

今野 話を戻すと、小学校三年生の時から隣のクラスの先生がいいなと思つて。一年二年もちあがり、三年四年もちあがり、五年六年……というような形で、だいたい二年もちあがりだった。その沖田先生のクラスの子になりたいなと思つたら、なんと五年六年で本当にその先生のクラスに

なつて。今でも覚えてるけど、一時間目の一番最初の時、美術の授業で、運動場の好きなどころに行つて絵を描きなさいっていう時間で、絵を描いてたら沖田先生が「あなたこんちゃんやる？」つて。その時からこんちゃんつて言われてた。名前も覚えてくたさつて、すごく嬉しかった。その時に教えてもらったのが、はつきり覚えてるんだけど、屋根があつてポプラの木があつてという風景、小学校の周りの住宅を描いてたんだけど、その時に沖田先生が「こんちゃん、よう見てみ。屋根は灰色つて思つてるかも分かんけど、レンガつてこう一個ずつ影があつたり光が当たつたり、そのレンガの色つて微妙に違うやる。葉っぱもよう見てみ」みたいなことを言つてくたさつた時にびつくりして。だいたい五年生くらいつてまだまだ子供だから好きなように書くでしょ。屋根はグレーとかさういう描きたいように描く時に、はじめてさういう風の一つの見方というか、あとから考えたらそれがいいかどうかはわからないけど、その時はものすごくびつくりして、はつきり覚えている。

中塚 物をよく観る、それが詩を書くことにつながつたのかも。

今野 その先生は本当に面白いというか、文集作つたり、クラスの歌を作曲させたり、みんな自分で調べて研究発表のようなこともした。今野の詩がラジオで放送されたこともあつた。

中塚 すこい。

今野 それで、その先生がうちの母のことも好きで。「赤旗日曜版」を、五年生の秋くらいかな、これ読んでみる？ みたいな感じで。だから「赤旗日曜版」を読んでいる。赤旗まつりとかも今野の母と今野だけは一緒に連れていつてもらつて、帰りに不二家でショートケーキ食べさせてもらったのも覚えてる。今考えたらその先生も若くて、あとから言つてたけど、「私一番元気な時やつた、あなたに会つたんは」みたいな感じ。

中塚 じゃあ学校の教科書で詩を読んで影響を受けたとかでは全然ないのね。先生だね。

文学少女だった母

今野 それと、うちの母親が文学少女で・・・だから小さい時から、萩原朔太郎とか土井晩翠とか。母親がご飯を作りながら「ふらんすへ行きたしと思へどもふらんすはあまりに遠し」とか言うの聞いてた。

中塚 えー、そんなの記憶してたの。すごいお母さんだね。

今野 源氏物語とかも詳しくあつた。

中塚 本もあつたの？ 家に。

今野 いや、家は貧しかったから。昔はお金持ちだったけど。貧しいというか戦争で全部財産を、旧満州に置いて逃れてきたから。何にもなかった。

中塚 じゃ、今ちゃんのお母さんたちは満州から引き揚げてきたの？

今野 そうそう、引き揚げ者ですよ。

中塚 引き揚げてからこつちで生まれたの？

今野 それで、今考えたら、こんなことあんまり言つたことないけど、父親が警察のちよつとだけお偉いさんみたいなものだったので、戦争犯罪人になつた。仙台の父の実家は古い家で、三五〇年くらい前に建つた家はまだ残つてる。

中塚 仙台。そうでしたね。

今野 そうそう、宮城県。ああいう田舎の人つて長男は家を継ぐけど、うちの父は長男じゃなかったから。

中塚 次男？

今野 いや、五男坊。おじいちゃんは、漢

文を読む人で・・・。

中塚 知識層だったんだ。

今野 神官さんの、何とかっていう神社から来た人らしい。父方のおじいちゃんの方は。田舎の人ってみんな長男以外はどこかへ行くじゃない？ お医者さんの家の子になったり。

中塚 斎藤茂吉もそうだね。

今野 そうそう。もうとつくに父は亡くなっているけど。つい最近なんだけど、父が孫の小学校で話をした時に書いたメモが出てきて。戦争になっても警察官になっていれば戦争に行かなくてもいいと思つて、警察官になったつて。結局戦争には行つてるんだけど。

中塚 小学校はどこでした？

今野 城東区。市内の。

中塚 お母さんの影響と、日共の活動家の若い先生の影響で詩を書き始めたのですね。

今野 先生は日共の党员やつたと思う。だから高校生くらいになったら、その先生と論争したり、もう喧嘩になったりで、しばらく長い間ずっと付き合いがなかったけど。中塚 今ちゃんは全共闘世代ではないわけ。今野 ちよつとだけずれる。

中塚 高校生の頃だもんね。

今野 ちよつとずれるけど、その流れはある。

中塚 高校生でありながら運動に参加していたのはその先生の影響がある？

今野 いや、違う。その先生は日共だから。

他所の兄ちゃん

中塚 誰の影響？ それは。

今野 今野より十歳年上の別のお兄ちゃん。

中塚 悪いお兄ちゃんがいるつて。

今野 いっぱいいる。いっぱいいるの。本当のお兄ちゃんは三つ年上で全然「悪い兄ちゃん」じゃない。

中塚 兄妹は二人きり？

今野 二人きり。

中塚 でも「悪い兄さん」「ひかる兄さん」もここでは本当の兄さんではなくてもいい。だけど全共闘の世代よりちよつと下なのに一生懸命石投げたりしてたのは誰のせい、誰の影響かなと思つてた。

今野 自分の三つ年上の兄は全共闘世代だけど、全然そういう意識もなくて。ノンポリやつた。大阪市立大学の経済学部で、絶対面白い時代にいるはずなんだけど、うちの兄は全然そういうのもないし、本もそん

なに読むでもないし、どちらかというと理系の人間。試験前だけ数学とか兄に教えてもらった。今野勉強嫌いだったから。

試験の前の日によく教えてもらった。教え方も下手というか、ただ自分が解いていってくれるだけなんだけど。

中塚 じゃあ違う付き合い？

今野 十歳年上の——それは「ACT」(仙台演劇研究会の機関紙)のミュージック・プロムナードに書いてるんだけど、中学校の二年生の時のこと。城東区に住んでいたけど中学一年の時に東大阪市に引つ越しをすることになった時にみんなと別れたくないから、そのまま董中学——今、今野が勤めてる学校のすぐ近くにマンモス中学があつて普通みんなそこに行くんだけど、引つ越したら東大阪に変わらないといけないところを、親が何でも好きにさせてくれていて「絶対移りたくない」と言つたら、父親が奔走して、籍を知り合いの人のところに入れてもらつて。別にだからエリート教育とかではなく、娘が本当にみんなと離れたくないし、嫌だと言つてるといふ単純な理由。ちよつと越境がだめになつていく時、それまでは結構大阪市内もゆるかつたけど、ちよつと今野くらいの時から越境は駄目と

いう指導が教育委員会から出たした。

中塚 それで蕁中学に入ったの？

今野 そのまま、蕁中学に、みんなが行くところに入った。今野は越境してバス通学していて、バス通学をしているある時間に、図体の大きい怖い感じのおっちゃんみたいな人が「君、蕁中学？」って聞いてきて、「はい」って言ったら、「僕、蕁中学の子の定期拾ったんだけど、今から仕事があるから、君、明日の朝学校に行ってこれ渡してあげて」って言われて、「わかりました」と。そのお兄ちゃんが家庭教師にその日も行かないといけなくて急いでおられて、それが中学校のすぐ近くに住んでたお兄ちゃん。今野はずっと本を読むのが好きな子だったから、ちょうどその時は「風と共に去りぬ」読んでた。分厚い本だけど面白くて。東大阪に行くバスは、三十分おきくらいで。なかなかバスが来ない。待ってるあいだ読んでたら、中学生で「風と共に去りぬ」を読んでいるなんて、ませた子だなと思った。後から聞いた。それでそのお兄ちゃんと時々バス停で会うようになって、それから写真を撮ってくれたり。

ちょうど十歳年上の人で。

中塚 凄い出会いだね。運命としか言えない。

い。ませたのね。

今野 そのお兄ちゃんが立命館大学の学生で、訳ありの人で、孤児で、あとから分かるんだけど。そのお兄ちゃんが大好きで、自分の兄は全然頼りないけど、その十歳上のお兄ちゃんに恋してて。中学二年生の時。中塚 今の時代だったら何か危険な匂い。その頃は安全だったのかなあ。

今野 まあね、そうだね。受験の時に僕見あげるからと、そのお兄ちゃんの家に行つてとか。勉強嫌いだから、しょっちゅうすっぱかしたりして。

中塚 それ大学受験？ 高校受験？

今野 高校受験の時に、そんな感じで。だって中学二年生の時に会ったから。時々道で会う、そのお兄ちゃんが賢い人だったんだな、今考えると。文学というか、魯迅とか、ジイドの『狭き門』とか、映画は黒澤明の「七人の侍」とかそういうのも、そのお兄ちゃんが見るように言ってるから。中塚 可愛がられてたわけだ、結局。どこかそういう魅力があつたのね。今ちゃんはいつも無垢というか無防備だよな。

今野 今考えたら。人懐っこい子やつたのかなあ。今野って赤ちゃんの時からブスで、全然可愛くないのに、隣の老夫婦が自分の

孫もいるのに、「なんで和代ちゃんばっかり猫かわいがりするんやろ」って近所のひとが不思議がってたって母から聞いたことがある。

活動に参加

今野 なぜか、偶然のそのお兄ちゃんから毛沢東のこととかおそわって。今考えたら、そのお兄ちゃん日中友好協会と関係が深かったと思う。友好協会自体が分裂していくねんけど。

中塚 六六年に毛沢東が指導した文化大革命をめぐって、支持するものと批判する側に割れていったことね。

今野 そう。そのお兄ちゃんの影響で、共産党——今まで沖田先生というか、当時のパルタイの日本共産党から、いや実は違うんだみたいな、そういう流れが実は始まっていたのだと思うんだけど。

中塚 私、全然分らないんだけど、この人は毛沢東支持だったの？

今野 そう。日中友好協会の、ちょうど日共と分派していくのかな。その時にリスベクトしていた小学校の時の沖田先生たちの思想というか、それと全然違う流れみたいなのが、この現実世界にあるんだな——。

ただこの時代、今考えたら、教育現場で、無着成恭とか国分一太郎とか、学校に綴方を指導していく運動みたいなのがあって。中塚 綴方教室の流れを汲んだ生活記録運動ね。

今野 その流れを持っておられたと思う。その先生のクラスになって初めて詩を書いたら何かに載ったな。母親とお風呂に行く時にかっこして、お母さんの心臓はびんと張ってるみたい。今考えたら比喩を使ってるんだろ。暗喩みたいな、子供心に。そういうので何か賞をもらったり。

中塚 小学校の頃に？

今野 そう。間借りしてただけど、下がりヤス工場か何かでお姉さんたちがいっぱいいて。校長室にラジオ局がやってきて授業ぬけて録音した。今野が黄色い旗のおじさんかな、何かの作文を書いた時にそれがラジオにとりあげられて、でもそういうの親に言うのがちょっと恥ずかしいというか、言えなかったの。そうしたら下のメリヤス工場のお姉さんたちが仕事をしながらそれをたまたま聞いていて、「和代ちゃんラジオ出てたね」みたいな。今だったら録音とかそういうのあるけど、当時はそういうのないじゃない。

中塚 その時に聞かないとね。

今野 そういうことがあって、小学校の時にちよつと型破りというか、元気な先生に出会ってというのが一番最初のきっかけだね。沖田先生は学校の中でも突出していた。中塚 詩を書きだしたのね。今ちゃんの詩はほとんど社会派だよ。抒情詩みたいなのはあまりないんじゃない？

今野 うーん、そうかな。

中塚 叙事詩じゃなければ抒情詩なんだけど、でもやつぱりほとんどが社会派だから、それはどこから来たのかと思つたら、やつぱり育ってきた中でそういうところにならずと目がいつてたのかな。

今野 うーん、どうなんだろうな。

中塚 これは内緒だけど、活動中に捕まつて名前を言わなかったという話してたじゃない？ あれは高校の何年生？

今野 それは大学。倉橋先生は勝手に高校生と思つてるけど。

中塚 大学はどこ？

今野 関西大学の法学部。あとちよつとしたら一九歳こえるギリギリの時だったんだけど、その時。

中塚 これって何年？

今野 一九七一年。

中塚 やつぱりあの七〇年代の闘争の中に入るんだね。

今野 三里塚はね。

中塚 三里塚に行つてたの？ 捕まった時は。

今野 三里塚。千葉。

中塚 三里塚って飛行場の？ 成田闘争の時？

今野 そう。それ。でもそれはすごく今考えたら面白かった。

中塚 関西大学ってそんなに学生運動盛んでもない方でしょ？

今野 いや、関大でも中核派とか社青とか。今野たちが入る前からだよ。

中塚 立命館とかの方がすごかつたんじゃないの？

今野 立命館は、民青。だから日共系が強くて、日共のそういう学生が多かつた。関西大学は中核派。白ヘル、佐々木幹郎さんとかの。幹郎さんは同志社。途中で辞めはつたと思うけど。でも今野は白ヘルじゃなくて黒ヘル。白い中に一人だけ黒で。どこかでそういうのが嫌いな。そういう組織というのが嫌いというか、戦いというか。

中塚 私はね、六〇年安保の世代だから全然、この頃は子供が生まれて、家にいた

時だから、黒ヘル、白ヘルと言われても全然分からなくて。倉橋先生にいつも怒られてるけど。当時過激派の中にはいくつかのセクトがあつて、ヘルメットの色で色分けしていたということね。その中であつて、今ちゃんひとりセクトには所属してなかつたということか。

今野 高城修三さんなんかは京都大学の黒ヘル、組織として、どのセクトにも属さないというか。赤ヘルのブンドとかに・・。中塚 連合赤軍の末路なんか、思い出してもかなしいね。

今野 今野はどこかで本当にたくさんの人達のために、たくさんの人達が歴史の中で死んでいくというか、死んでいつてるし、そうだと思うんだけど、どこかで自己矛盾しているんだけど、一人の方が本当は好きなんだ。

タイトルと表紙絵と

中塚 でもあまり自分のことを書いたりしないよね。今ちゃんが自分のことを書いてるのはあんまりないですよ。『パセリ市場』の中にはちょっとある？

今野 うーん、どうだろう。いつも自分のことを書いてるつもりなんだけど。

中塚 勿論詩の中に自分はいつもいるけど。今度の詩集では、私は「悪い兄さん」が大好きなんだけど。

今野 「悪い兄さん」はタイトルが決まってるから、新しく作ったもので。

中塚 すこいな。それで書けるってすこいと思うけど。

今野 本当は女の人の詩を書こうと思って。三回目。詩集って同じのを書いててもつまらないし。最初の第一詩集はやみくもに自分で書いてというか、その時付き合ってた男と別れるというか。

中塚 「悪い兄さん」のこの表紙の絵その人の絵？

今野 違う。ケンボウの絵を持っていったんだけど、思潮社で――

中塚 こっちの方がいいって？

今野 というか、「どうされますか？」と。中塚 これって誰の絵？

今野 中島浩が装幀。装画は木村タカヒロ。最初見本で送ってもらった時は、強烈やなあ、この絵は絶対、みんな怖がるだろうなあと思った。

中塚 今ちゃんがもらったの？ その絵は。今野 もらってない。

中塚 この絵は誰が見つけたの？

今野 いや、書いてもらったの。詩集を読んで書いてくださったの。

中塚 えー、そうなの。すこいな。

今野 編集者の出本さんが頼んで書いてもらってくださったって。どちらかを選ばないといけない。ケンボウの絵は第一詩集も第二詩集の時も使わせてもらつてるから。

中塚 それで、詩ですけどね、こういう社会的なものが多いのは分かるんだけど、なぜか神様、キリストとかマリアとかがすぐ出てくる。

今野 好きなの。

中塚 それはなぜ？ クリスチャンでもないんでしょ？

今野 うん。だから神様というのが。別に、例えば岩成さんとかみたいに、

論理的に考えているのではなくて。

中塚 マリアの捉え方も違うしね。

今野 詩って一つのイメージだったり言葉だったり意味だったりすると思うんだけど、それをこえてあるものというか、今野の場合。マリアにしてもキリストにしても。

マリアの場合はやっぱり娼婦の「マグダラのマリア」とキリストの母である「マリア」。

それから「焼け跡のマリア」とか・・。マリアという音の響きの中にある女の人が

持つてる音の響きみたいなものとか。そういうのに直感的に惹かれる。昔は男に生まれたかったし、ずっとそうだったんだけど、子供がやってきてくれたくらいから、いや女でやっぱり面白かったなと思うようになった。

本当に書きたかったもの

中塚 読んでるとすごく「女」という感じがするよ、それを読んでも。

今野 やっぱり女の方が面白い。もし男に生まれていたら絶対女に滅ぼされていたとか。

中塚 女で良かったと。

今野 年をとって、重ねていくということもひっくるめて。

中塚 すごく色っぽいのがいっぱいあるよ。

今野 女の人の詩を書くつもりだったの、三冊目は。

中塚 かなり出てるよ、それが。

今野 先生に詩集のタイトル『マリア』？

「そんなもんあかん」と言われて、『悪い兄さん』って言われた時、「ああおもしろいな」と思って実は変えたの。

中塚 『悪い兄さん』で良かったと思うよ。

『マリア』じゃあまりにもストレートすぎ

て。「マリア」はタイトルとしては迫力がないけど、「マリア」って詩はいいと思う。今ちゃんが「マリア」ってタイトルにしたかったって気持ちは分かる。

今野 だから本当にこれは倉橋先生のお陰なの。タイトルって大きいし。

中塚 やっぱりタイトルとこの表紙と中身とがばっちり合ったという感じだね。

今野 これは編集者の出本ちゃんのお陰でもあるの。

中塚 本当にびったりいってるから、表紙見た途端にどきとした。開いた途端にまたどきとした。

今野 いつも、三冊ともそうんだけど、

今野は過剰だから、最初作る時って詩がこの倍くらいあって、『悪い兄さん』も。出本ちゃんにこれちよつと多いかなと言われて、ちよつと多いと言ったら絶対多いんだなと思って半分減らして捨てたの。

中塚 お母さんの詩もあつたもんね、そういえば。

今野 母の詩は詩集のあとからです。――

『悪い兄さん』を出したけど、詩集作った時も母には見せてない。母親はものすごく兄のこと心配してたから、自分の兄のこと書いてるんだらうなと思うだろうと思つた

から、兄にももう死んでしまった母にもこの詩集を見せてない。

中塚 そうだね。でも序詩に「ひかる兄さん」を入れてるからね。それで上手くいってると思うよ。「ひかる兄さん」がいて、『悪い兄さん』がいてって感じて。この詩集良かったなと思う。だって『ピターフルーツ』だって凄いな。

今野 それ一番新しい詩なんですよ。

中塚 吊るされている果実（黒人）から松本ショウコウに繋げるという人はなかなか少ないからね。

今野 その詩は、詩集が出るギリギリの時に「ひびき」という詩誌に、原稿依頼があつて書かせてもらったものです。ちよつとショウコウさんたちが処刑された時に書いた、一番新しいもので、実はその詩をギリギリ放り込んで。自分の一番新しい詩を、この新しい詩集にやっぱり入れたいと思つて。「金子文子」の詩と取り替えた。無理を聞いてもらった。

中塚 今ちゃんは言葉がどんどん出てくるから長い詩が多いよね。どちらかという長い詩が多い。

今野 そうかな。ずっと永遠にしゃべってみたいなところはあるかもしれない。

中塚 あるある。限りなく言葉が出てくる感じ。子供の詩も多いでしょ、案外。虐待された子供とか多いよね。

今野 ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』のイワン・カラマーゾフの会話と
いうか、あれは小さい子が本当に不条理なように不幸せで、その時「神様ってどうよ」みたいな感じで聞いている。自分が小さい時にそれは思っていたから。不条理という言葉は子供の時は分からないけど。

中塚 納得いってなかったんだね。

今野 いやもうずっと納得はいつてないというか、それって大人に言っても解決することじゃないなというの、子供の時に気がついてた。結構無邪気に振る舞ってたり、カマトトぶったりはするけど、実は子供ってすごく冷めてたり、大人以上に傷ついていた、大人以上に優しかったりする。

中塚 意外と諦めるのね、子供って。

今野 うんうん。

中塚 だって抗うことができないんだから。その諦めというのがすごく可哀想だね。でもこれね、この「厄災の赤ちゃんを」。これを読んだらね。お乳飲ませるでしょ？ 本当にこれはちよつとシヨックだった。「懐かしい ああ痛さで 乳が

ゆっくり張りはじめている」ってなかなかここは書けない。これでやっぱり今ちゃんって女なんだってすごく思ったわ。「マリア」とかでもそういうのあるけど、これはすごかったなと思うて。

影響受けたのは吉本隆明

今野 やっぱり詩って面白いなと思うのは、いつも最初にこういうものを書こうとか思ったこともないし。

中塚 出てくるんだね、ひとりで。

今野 いや辛いんだよ、詩を書くて。詩を書くのが好きな人っていっぱいいるでしょ。多分今回同時受賞した永沢幸治さんもそうだと思う。

中塚 それ聞きたいと思ったの。詩を書くのは楽しいかって。

今野 いや全然。

中塚 苦しい？

今野 苦しいというか、いつも締切りがあったりとか、倉橋先生とかをびっくりさせたいというか。だから今野は詩人じゃないと思う。

中塚 詩人だと思うよ。絶対詩人だと思う。

今野 いやいや。吉本隆明とかでもずっと別に発表も何もなしに、詩を書いておられ

たでしょ。「転位のための十篇」とか、ノートのような形で。誰に出すともなしにそういう風に詩に向きあって、黙々と書いておられたと思う。それが詩人。今野は違う。中塚 それは関係ないでしょ。

今野 今野は最初の頃は、中原中也とか立原道造とか萩原朔太郎とかがすごく好きだったけど、初めてシヨックだったのが「とおくまでゆくんだ ぼくらの好きな人々よ／嫉みと嫉みをからみ合わせても／窮迫したぼくらの生活からは 名高い／恋の物語はうまれぬ」という。「涙が涸れる」という詩なんだけど、一番最初の出だしが「けふから ぼくらは泣かない／きのふまのように もう世界は／うつくしくもなつたから」というその出だし。今野はやっぱり一番影響を受けているのは吉本隆明だな。こんな風な詩、これって抒情詩でもないし、もう自分に楔を打つというか、本当に泣きたかったり、崩れていつてしまったり止めたくなくてしまつたりすることを、「けふから ぼくらは泣かない／きのふまのように もう世界は／うつくしくもなつたから」、「とおくまでゆくんだ ぼくらの好きな人々よ」と。だから今でもフレーズを覚えてるし。最初こういうのが

詩とは思わなかったけど、こういう風に
して言葉というのは生きていたんだみたい
な。

中塚 なるほど。だから今ちゃんはすごい
詩人だと思うよ。

今野 いやいや。

朗読のこと

中塚 ところで、朗読をあちこちでして
でしょ？ 略歴のところに書いてあるよう
に。

今野 そうそう。なぜそう書いたかと言
うと本当にお世話になってお店屋さんだ
から。受賞しましたと言っていないから。
お札にという意味で。

中塚 伝わるというね。それで、いつ頃か
ら朗読をやりましたの？

今野 朗読やりだしたのは、30年……。い
やもつと前になるかなあ。シャンソニエボ
ンク。沖繩の人たちがいっぱい住んでる大
正区のとこに、当時シャンソニエボンク
というギャラリーがあつて。維新派って、
政治の方じゃなくて芝居の。大阪で生まれ
た演劇集団。そのカメラマンと衣装デザ
イナーをやっていた夫婦が、そのシャンソ
ニエボンクっていうギャラリーをやってお

られて、そこで初めて朗読をさせてもら
いました。その時は、旭星さんという筑前
琵琶の伴奏でさせてもらつて。その時に滴
使った光の照明で猫丸さんという人が入
ってください。それでやったのがはじめて
の朗読。だからだいぶ前。

中塚 その時から朗読に取り憑かれちゃつ
たわけ。

今野 いや、すごく恥ずかしい。

中塚 いい気分なんじゃないの？

今野 全然。恥ずかしい。気分って本当、
全然よくない。それはない。

中塚 でもあちこちでしてるから。酔つて
るみたいに朗読してる感じ。

今野 それはない。本当に酔つてない。そ
れは恥ずかしいからなの。本当に卒倒す
くらい恥ずかしい。

中塚 えー、そうなの。でもそれ分かる。

俳優さんでもすごく恥ずかしがり屋で、普
通だったらすごく恥ずかしいんだけど、演
技やつてる時は夢中でやつてるらしいの。
竹中直人だったかな。すごい演技する人だ
けど、インタビューとかしたらすごく恥ず
かしい、恥ずかしいって言つて、それで
あれだけ演技ができるのかと。やつてる時
はそこに入りこんでるから全然違うんだっ

て。本当はすごく恥ずかしがり屋なんだ
て言うから。今ちゃんの話の聞いたらそれ
を思い出した。

今野 今野はね、照れくさいの。照れくさ
いというか。

中塚 でもやつてる時は夢中でやつてるで
しょ。

今野 うーん。

中塚 恥ずかしくてうろろしてたら見て
る人が入れ込めない。

今野 それはそう。それはなんとなく分か
るの。

中塚 でしょう。だからやつぱり演技者と
してやつてるわけよね。面白いなあ。それ
から私が聞きたいのは、朗読する詩と普通
に書く詩と分けてる？

今野 全然わけてない。朗読しようと思
つて詩を書いてないから。

中塚 でも第二詩集の『ニコラス・スレッ
ジ・ブルース・マシーンを聞きながら』な
んか「ポエトリー・リーディング詩集」つ
て書いてあるよ。

今野 それは倉橋先生に「ポエトリーリー
ディング詩集というのを一冊今ちゃん作
り」と言われて。

だから朗読のためには一回も書いたことは

ない、実は。

中塚 確かにね、その詩集本当にポエトリリーディングのための詩ばかりじゃないと思うのよね。逆さまから書いてあるのかもあるし。結構今ちゃんの朗読聞いてたら、自分の好きなどころだけリフレインさせたり自由にやつてるじゃない？ それならそういう風に書くでしょう、普通。朗読のためならね。だからそうじゃないんだと。

今野 そういう風には実は一回も書いたことはないの。

中塚 「とんがってとんとんとか」とん（？）」「とんとまれ（？）」。要するに言葉遊びとかがよく出てくるから、それで朗読のための詩集なんだという風に思われる。そうでもなくて、これ言葉で出てくるんだね、勝手に。リズムがね。

今野 というか音楽が好きなの。もう生まれてこないけど、神様が生まれてきていいよと言って何でも好きなことしていいよと言ったら、今野は音楽を作ったりしたいなと。

中塚 うん。やっぱりリズムがね、「ダンスはだしのひとりのものもいろいろの」ダンスはだしのひとりのものもいろいろの」という。

らば」なんかでもすごくリフレインが多いから、朗読したらすごくいいだろうなと読む人も思うじゃない。ひとりでも出てくるんだね、リズムが。

今野 うん。朗読するために詩を書こうとは思ってない。

中塚 朗読は好き？

今野 好きというか、やっぱり言葉って――

中塚 声に出した方がいい？

今野 いいか悪いかじゃなくて、言葉って原初的なもの。いろいろな人が言うけど、今野の場合は、一回書いたらもうあとは――例えば宮沢賢治とか誰でもそうだと思うけど、あとから手直ししたり繰り返し、直したりされると思うけど、今野は全然興味なくなるの。書いている時は面白いけど、もう一回それを見て何行目がこうだからこれを変えようとかあまりそういうのはない。中塚 え、すごいね。それでこれだけ出てくるんだから

朗読も音楽の演奏も料理も同じ

今野 だからって、さっと書いているわけじゃないよ、もちろん。集中して書いているから。勝手に自動記述のように書いてるとか

そういうのじゃない。だから書くのはやっぱりしんどいし、嫌なんだけど、そうじゃなくても一回生かされるというか、その詩を。その時に自分が声を発していく時は、ものすごく新鮮になるの、自分の詩が。だからいつも何回も何回もリーディングするわけでもないし、そんなに機会がしょっちゅうあるわけでもないんだけど、もう一回詩と生かされるというか。それがシヨツクというか。多分、文字の人はそういう風に繰り返し、それこそ宮沢賢治とか、何回も何回も校正されたり書き直したりするじゃないですか。でも今野の場合はどちらかというと、書き直したくもないし、見たくもないの。

中塚 読んだらかえって新鮮なわけ、もう一回読んだ時。

今野 でもリーディングする時に選ぶと思うし、リーディングに向かない詩というのはあると思うの。意味性みたいなものはかりがどんどん流れていたら聞いている人もしんどいだろうし。でもそういう時にもう一回だけ詩の中に響いているもの、もしくは隠れていたものみたいな、そういうものが蘇るといいうか、新しく。しかもそれは消えていくの。言葉は残ってるじゃない。でも

それがリーディングはその場だけ、本当にその場、そこにいる人だけ。いつも倉橋先生とか高城さんに笑われるんだけど、その場に一人か二人だけの時もしよっちゅうあるんだけどね。

中塚 聞いてくれる人が？。

今野 それはもしかししたら誰もいない場合もあるかもしれないし、そういう場合でも、もう一回だけ詩が生まれるというか、新しく生まれるみたいな、そこで詩を生きられるみたいな。でもそれはその場で消えていくの。だから——中塚さんも好きだと思うけど、今野、料理とか好きなんです。料理ってアドリブで。

中塚 その時その時で味が違うしね。一回性だね。

今野 そうそう。たまたま上手くいったものもあるし、考えていてもそれが上手くできなかつたりもするし、生で、しかも深く消えていくでしょ。色も変わっていくし、その時だけでしょ。その時よりも古びていくものもあるし、早すぎるものもあるけど、そういう潔さというか、そういうのが料理と似てる。それに近いのが音楽。音楽がもしかししたら一番好きかもしれない。

中塚 音楽って演奏者によって、同じ楽譜

のはずなのに全然違うよね。それがすごく面白い。

今野 それはそう、違うと思う。

中塚 音符の通りに弾いたら同じになるはずだけど、違って当たり前よね。歌も。カラオケって歌う？

今野 歌は歌わないよ。カラオケとか好きじゃない。いや一人で歌うのは好きだよ、自転車漕ぎながら。でも人前でカラオケで歌うとか逆に嫌い。職場というか、学校の先生ってみんなカラオケ好きなの。なぜこの人たちは上手いのかと思ったらみんなカラオケに行つて歌い込んでるの。びつくりした。教員ってカラオケ好きよ。うまい人いっぱいいる。

中塚 歌って歌手じゃないからうまく歌わなくても別に自分が歌って楽しかったらいいもんね。

今野 全部そうよ。人前はどちらかというて全部苦手。自分一人の方がいい。

中塚 私も。朗読もまずやらないし。恥ずかしいから。

今野 そう、恥ずかしい。

中塚 そっか。自分の詩で、例えば「悪い兄さん」の中でどれが一番好きかって聞かれたら選べる？

今野 選べないよ（笑）。自分の詩って好きな詩がないもの。いつも一番新しい詩、この詩集の詩なんてもう二、三年前で終わってるから。だから自分が一番好きなのは、一番新しい「イリプス」32号で書いた「兎我野町」という詩かなあ。

中塚 子供の？

今野 子供の。その女の子の詩の方が今は好きだなあ。

中塚 すでにできたものは、どんどん捨てていくんだね。脱皮。

今野 どちらかというところあるかもしれない。だから本当は冷たい人なんだと思う。自分の中にもすごくあるの、そういうの。

中塚 そうじゃなくてね、常に完成してないという感じかな。画家でも 絵にサインを入れるのは完成したという意味らしくて、売るときは仕方ないから入れるけど、サインを常に入れてくれないと言つてた人がいたから。常に完成しないのね。

今日はインタビューとはとても言えない、楽しい二人の会話みたいになってしまつて、ごめんなさい。でも、本音の話が聞けてよかったです。ありがとうございます。

今野 ありがとうございます。